

地域の底力

仙北市



秋田県仙北市 せんぼく
優れた舞台芸術を要に
地域とともに歩む
劇団「わらび座」

武家屋敷を桜が彩る角館や かくのたて
日本一深い湖・田沢湖を有する秋田県仙北市。
この地に根づいた劇団「わらび座」は、
うよきくせつ
紆余曲折を経て活動を多角的に広げ、
今日も世代を超えた感動を発信している。
舞台芸術を核にした取り組みは、
地域の伝統文化や観光とも結びつき、
未来に向かって着実に歩んでいく。

東北の地で紡がれてきた 知る人ぞ知る感動の舞台

「未来よ、やってこい！」

ミュージカル「げんないー直武
を育てた男」の最後、出演者が
舞台上に勢ぞろいした力強い歌声を
聴きながら、熱いものがこみあげ
てきて視界がにじんだ。

夢を抱き天才平賀源内のもとに
集まった人々を描いた物語だ。時
代の波にのまれ、挫折を経てもな
お、彼らは未来を思う。秋田県東部
岩手県に隣接する仙北市に拠点を
置く劇団「わらび座」が営む「わ
らび劇場」でのひとこまた。

客席の多くを修学旅行の中学生
が占めていたがゆえ、当初は教訓

客席数710席の「わらび劇場」。ステージ後はすべての
役者が出入り口にそろって、観客を見送るのが恒例だ。



めいた内容を想像していた。果た
して、ユーモアを巧みに交えた展
開と、工夫を凝らした舞台のつく
りは圧巻。役者たちが放つ熱気に
も、力強く心をゆさぶられた。

脚本、演出は、市川猿之助氏の
スーパー歌舞伎「新・三国志」を

はじめ、数々の話題作を手がけて
きた横内謙介氏。ほか、日本屈指
のスタッフが裏方を支え、地元
出身の若い才能が輝く一級品の
ミュージカルが、東北の一角で待
ち受けているのだ。

終演後、平賀源内役の三重野葵

平賀源内役の三重野葵氏(右)は、親子二代でわらび座の劇
団員に。母親が舞台に立つ姿を見て役者の道に進もうと決
意した。小田野直武役の鈴木裕樹氏(左)は、隣接する秋田
県大仙市出身。「直武は地元の誇り。しっかり演じたい」と。



氏は、汗も
まだひかな
いままに満
面の笑顔を
見せた。
「舞台は
一つのコ
ミュニケー
ションだと
思っています。
生の人

間が目の前で演じているのが、映
画やテレビとは違う。一日として
同じ日はないし、お客さまからは
毎回違う反応があつて僕らも元氣
づけられるんです」

杉田玄白氏「解体新書」の挿絵
を描いた小田野直武役を務めたの
は鈴木裕樹氏。直武は地元角館出
身の秋田藩士で、平賀源内を頼っ
て江戸で洋画を会得した。劇中の
台詞は、秋田弁だ。

「ロビーでお客さまを見送る際
僕の名前ではなく、「直武さん」と
声をかけてくださる方が多くて、
ここではやはり馴染みのある人な
のだと実感しました。わらび座の
存在を知りながら、劇場に来るま
では至っていない方を、今回の
ミュージカルで掘り起こしたいと
思っています」

挫折が生んだ 多角経営への道

そもそも「わらび座」の歴史の
始まりは、前身「海つばめ」が東
京で創立された一九五一年に遡る。
創設者の原太郎氏には、「民謡で戦
後荒廃した日本人の心を癒やした





わらび座社長の小島克昭氏は北海道出身。役者として舞台上に立った後、わらび座養成所の指導者を経て、危機に直面していた劇団を建て直し、現在の体制を築き上げた。

い」との思いがあったという。二年後、民謡民舞が盛んな秋田県に拠点を移し、「わらび座」と改名した。七四年には、全国八〇〇万人からの募金をもとに「わらび劇場」が完成した。

現在の社員数二五〇名。動員数は、年間約二五万人。日本では「劇団四季」「宝塚歌劇団」に次ぐ規模を有し、地元のみならず国内各地や海外での公演で喝采を浴びてきたが、事業展開は劇団関連に限らない。温泉宿泊施設や地ビールの製造販売など、実に多岐にわたっているのが興味深い。

しかしながら、創立当初から今ある姿を目指していたわけではない。八三年から社長を務める小島

克昭氏が、その背景を振り返る。小島氏が社長就任時、劇団は存続の危機に直面していたという。

「財務問題で、倒産寸前の状態。さらには一五〇人ほどが辞める、わらび座にとつては歴史的な大事件が起きたんです。組織面でも課題がありました。創立者の原太郎は、戦争をくぐり抜けてきた人。精神性が高くカリスマ的な存在でしたから、劇団員は皆、頼り切った状況でした」

八八年には原氏が亡くなり、存続という使命を劇団員全員があらためて強く思う。

事態を乗り越えるためにまず、すべての人が同じ待遇の下で共同体生活を送るという草創期と同じ経営形態からの転換を図るなか、敷地内から温泉が出る幸運に恵まれた。その結果、地元住民との共生という劇団のテーマを貫くため、温泉施設と劇場を合わせて機能させる試みがなされる。もともとあった宿泊施設を改築し、九二年には「温泉ゆほぼ」がオープンした。

加えて翌年、アメリカ・オレゴン州アッシュランドへの「シェークスピア・フェスティバル」の視

察が、大いなる希望をもたらす。

「人口二万人のまちに三つの劇場があり、当時で約三六万人の集客（現在約五〇万人）があったんです。全米最大の地域劇場で、たとえ田舎でも、観光と劇場文化が結びつければ、産業として成り立つことを目の当たりにしたわけです。劇場を中心に地域活性化の発信母体となる芸術村をつくるう、との思いが生まれました」

創業四五周年を迎えた九六年には、伝統工芸体験施設や研究施設も含めた「たざわこ芸術村」が幕開け。翌年は秋田新幹線開業と合わせて、秋田県初の地ビール造りとレストランの営業が始まる。そして舞台そのものも、てこ入れが行われた。

「われわれは取材から創作、作曲、役者の育成、道具製作、営業活動まで一貫して作業をしてきた。その結果、自己完結型組織になっていったんですね。正直なところ、技術的にも芸術的にも次第に後れをとり、発展性を失っていた。ガラパゴス化していたわけです。ですから一番最初に考えたのは、外部の血を入れるということでした」

皮切りとして、宝塚歌劇団から演出家の大関弘政氏を招聘。ほか、脚本家のジエームス三木氏や舞台美術家の妹尾河童氏、朝倉撰氏をはじめ、舞台芸術の最前線を行く大御所が作品に関わり、新たな風を吹き込んだ。

「東京とはまた異なる、秋田発の独自の舞台を生み出そうとしているわらび座に力をかしたい、という先生方が多かったですね。日本の伝統に根差しつつ新しい芸術をつくる試みや、資金は潤沢ではないものの、夢を持っているのがおもしろいと思われたようです」

やがて劇場、温泉、レストラン



古い街並みに馴染むアンティークの着物を着付けてもらい、角館を散策する体験コースが観光客に人気。



地元育ちの門脇光浩仙北市長。「秋田県人は大らかで、芸術や文化を愛するラテン気質。わらび座を窓口にして、創造文化都市として全国に発信していく。少子高齢化でも、交流人口は増やせる」と朗らかに語る。

「わらび座」を要に 秋田県の玄関口は 世界へ

順調に復活を遂げてきたが、現状は芳しくない。大きな影響を受けたのは、東日本大震災だ。秋田県は実質的な被害こそ少なかった

と多様に楽しめる「たざわこ芸術村」は地元民が集う憩いの場になり、地域の雇用にもつながった。角館駅から車で10分の利便性や道路事情の進歩も幸いし、他県からも観光客が訪れるように。

「地域興しは、若者、ばか者、よそ者がやるとよくいわれますが、われわれは少なくともよそ者であり、ばか者であり、かつては若者でもありました(笑)」

ものの、風評で観光客が激減。田沢湖や武家屋敷、桜祭りや賑わう角館という県内有数の観光地がある仙北市も、かつては年間六〇〇万人あつた観光客が五〇〇万人台にとどまったまま。

また仙北市を含め秋田県は、人口減少率と高齢化率、さらには出生率の低さで全国一位。「少子高齢化の先進県」ともいわれる。一方で一二年には「文化庁長官表彰(文化芸術創造都市部門)」を仙北市が受賞し、文化芸術の活用により地域振興で成果をあげたことが評価された。

そんなわらび座とともにある仙北市の「今」について、門脇光浩市長に話を伺った。仙北市は〇五年に田沢湖町、角館町、西木村が合併して誕生。わらび座の拠点は旧田沢湖町だったが、合併による利点はあつたのだろうか。

「わらび座に限られた地域だけの存在ではないという考え方を広めるには、とてもいい機会でした。仙北市の中心的な企業、あるいは文化として、合併したからこそできることがあると思っています」
仙北市とわらび座との連携によ

る構想のひとつが、芸術大学の設立だ。音楽を含め、舞台芸術の基盤はできている。手間暇かけて収集されてきた各地の民謡舞踊の集積は、全国的に見ても貴重な財産だ。

さらに国際交流のネットワークも広げたいと、門脇氏は話す。

「ゼロから始めたら百年かかりますが、わらび座のおかげで、既に世界に向けて扉が開いている。多くのお客さまが、国内外からおも



秋田新幹線「こまち」で東京から角館まで約3時間。駅から「たざわこ芸術村」までは、シャトルバスが運行されている。



わらび座劇団員の指導のもとで踊りを稽古する修学旅行の生徒たち。ミュージカルをみた後は、おのずと感情を解放して踊れるようになる。



しろい情報をもって訪れてくれる。わらび座を介して視野が広がった人たちが、いっぱいいるわけです」
仙北市の人口は現在三万人を切ったが、少子高齢化の取り組みも進んでいる。その一環が、地元金融機関との協力体制だ。

「子育て世帯の住宅のリフォームや新築には、利率を下げたローン商品を提供してもらいました。ほかの地域にも広まりつつありますが、なぜ仙北市が発端になったかという点、秋田県の東の玄関口だから。秋田新幹線で一番先におりるのは田沢湖駅、もしくは角館駅。仙北市民が暗い顔をしていては「秋田県はいいね」と思っていただけ

ない。僕らにはそういう責任があるんです」
 定住者ももちろん大事だが、年間五〇〇万人の観光客、すなわち交流人口にはまた別の将来の広がりがあると、門脇氏は未来に期待を寄せる。その実例が、わらび座が七〇年代後半から手がけてきた、わらび座の舞台鑑賞、俳優が指導する舞踊体験と農業体験（農家民



藤井氏は1996年に、大人の一一般客も利用できる農家民泊施設「泰山堂」を自宅の敷地内にオープンさせた。海外からの留学生も、滞在を楽しんで帰るという。



秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会理事長の藤井けい子氏は各地の講演に赴き、農家民泊の魅力や自らが体験した感動を語っている。

泊・日帰り)をセットにした修学旅行だ。
 NPO秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会理事長を務める藤井けい子氏は、子どもたちの農業体験を初めて受け入れたときの記憶が忘れがたいという。
 「家が大きすぎるとびっくりしたらしく、そこから探検してしましたね。私が一番驚いたのが、白いご飯を食べて何で味付けしたのかと聞かれたことですね。自分たちが普通に食べていたものを何でも美味しいと褒めてくれました。農家の嫁つて褒めてもらえる存在ではありませんでしたから、初めて褒めてもらい、意欲がわきました。もう子どもたちがかわいかったで

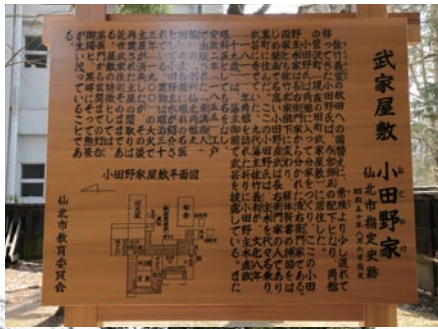


すね」
 わらび座に泊まっている子どもたちは、朝各農家に五人くらいずつ分散して、農作業に奮闘し、夕食まで農家の家族とすごすのである。「秋田の父さん、母さん」への思いが胸に深く刻まれ、後に再訪することも珍しくない。
 「毎年子どもたちとの交流から生まれた感動で学び得たものは大きく、私たち農家の道標ともなっています。三〇年以上も体験は続いていますが、同じ感動は二度と無く、いつも新鮮ですね。
 だから長続きして、来てくれる学校も多くなり、受け入れる農家



武家屋敷の一角では、イタヤカエデの若木の幹を帯状に裂いて、これを編む伝統工芸品「イタヤ細工」の実演販売も行われる。

も多くなってきたと思います。農作業をし、達成感を知り、食を通じて感謝を感じ、心の交流が深まっていくんですね。グリーン・ツーリズムは、収益を積むものではなく感動の積み重ねで豊かになっていくのではないかな」
 これまで受け入れを体験した農家は、延べ七〇〇軒。組織だった受け入れ体制があるわけではなく、わらび座を中心にごく自然に継続



「武家屋敷通り」には、かつての中・下級武士の侍屋敷である旧家が当時のままの姿に立ち並び、いずれも内部を見学できる。



しているのが面白い。

農業体験や農家民泊は、仙北市のみならず、県内全域に根づきはじめているようだ。秋田県はもとも、米や秋田杉、金銀銅、石油など資源が豊富。恵まれた環境が生んだ「ラテン系」ともいわれる天真らんまんな気質が、子どもたちを大らかに受け入れるのだろうか。

感動が新たな未来をつくりだす

芸術作品としてのクオリティを高めながら、多角化で劇団経営

を安定化させてきたわらび座だが、将来への布石についてはどうだろうか。

わらび座への愛情と今後の課題について語るのは、長年にわたり応援し続けてきた安藤醸造の安藤大輔氏。安藤醸造は創業一八五三年（嘉永六年）以来続く、老舗の味噌醤油蔵だ。

「あの舞台に感動しない人はいないでしょう。価値の高い舞台はどんな人が見ても感動するものです。それをこの町から発信できているのは地元の誇りです」

わらび座がこの地に根づいた背景として、江戸時代に角館を治め



わらび座の活動を長年見守ってきた安藤醸造代表取締役の安藤大輔氏。舞台の話になると、自然と顔がほころぶ。

ていた佐竹北家（秋田藩佐竹家の分家）の影響もあるのではないかと、安藤氏は話す。京都の公家から養子を迎えた佐竹北家は、雅やかな文化を育んできた。

「桜も武家屋敷もわれわれのような店も、佐竹北家の連綿と続く公家文化の中で生まれてきた。わらび座も、根っこが同じところに花開いているのだと思います」

役者と観客が作り上げる舞台ならではの迫力はテレビとは全く違うものだ。しかし、日本では劇場に足を運ぶ人はなかなかいない。安藤氏は舞台芸術に興味をもつのは一部の人という現状を変えたいと、友人知人を舞台に誘っては裾野の拡大に努めているという。一

度舞台をみた人の多くは、わらび座のファンになるからだ。さらに気に掛けているのは、わらび座の多角経営のその先だ。

「幅広く成長した分、跡を継いで維持する人を早くつくらないと大変だと思っています。民俗芸能の基地としての存在と経営の双方を理解しながら、トータルで見なくてはなりませんから。今が大きな曲がり角です」

わらび座を未来に継ぐ。次世代が担わなければならない大きな課題だが、曲がり角が上向きになり、プラスになる可能性もあると安藤氏は期待する。

次世代への橋渡し役として、転換期の一翼を担うのが、一四年二

「人間に役立ちそうなことは何でもやってみる姿勢がわらび座の魅力」と話すのは、わらび劇場支配人の山川龍巳氏。



年前のことだ。

当初ショッピングモールの集客装置として劇場をつくりたいと考えていた宮内氏だったが、わらび座のステージに心を動かされ、その考えを一八〇度変えた。

「純粋なビジネスというより、感動を大勢の人と共有したい、劇場はそのための器だと。自分たちが戦後作るうと思つた社会にするために、この事業に金を出さないわけにいかん、とお考えでした」（山川氏）

月に「わらび劇場」支配人に就任した山川龍巳氏だ。長崎県出身の山川氏は、一八歳のとき、たまたま知人に誘われて見たわらび座の公演で人生が変わった。

「泣いてしまつたんです。ステージの劇団員がきらきらと光って、充実感にあふれていた。この人たちと生きられたら、人生の意味がわかるかもしれないと思いました」

親に反対されつつ秋田に移り住んで役者を目指した後、三歳から全国公演のセンター長として経営に携わるように。そんな山川氏に、愛媛県で様々な事業を営む宮内政三氏から、劇場をつくりたいという話がちこまれたのは一〇

力し、学生たちの観劇料や劇場までの足代を補助するため年間一八〇〇万円ほど資金が集まった。

「坊っちゃん劇場」は、新たな地域拠点劇場として集客を増やしている。

愛媛県のサポートシステムは、秋田でもはじまり、今年度は約一万人の学生を対象に支援が行われるという相乗効果を生んだ。さらに仙北市に戻つた山川氏は、愛媛県で培われたノウハウと政財界との人脈をもとに動き出す。まずは「秋田市のど真ん中で出張公演ができないか」という提案に、県側も興味を示しているという。

「わらび座は文化芸術界で注目の

的のひとつ。成長すればビジネスモデルになるかもしれないという、期待をもつ人も多いんです」

これまで舞台芸術に縁がなかったものの、わらび座の舞台に魅せられた政財界の人々は少なくない。山川氏の話をつつ、「舞台は一つのコミュニケーション」という三重野氏の言葉とともに、平賀源内の台詞が胸に蘇る。

「未来は変えることができる」明日のことは、誰も予測できない。しかしながらわらび座の舞台は仙北市の、そして観客の未来を変える力を秘めているのではないか。そんな明るい思いがふくらんできた。

「芝居はしょせん作りごと」というような声も聞きつつ、粘り強く協力を求めて歩く。やがて、愛媛県の政財界の理解が得られるようになった。

「次世代教育を劇場文化で徹底的にやってみようと、舞台芸術体験サポートシステムを実現してくれました。舞台芸術は子どもたちにとって、とてつもない力がありますから」

愛媛県内の経済界と教育界が協

